

書評

《看護管理まなびラボ BOOKS》

組織の力学

つかさど

パワーを掌る

成功し続けるための組織行動論



- 著 高岡明日香
- 定価 3080 円 (本体 2800 円 + 税 10%)
- 判型 A5
- 頁数 232
- 発行 医学書院

評者

手稲溪仁会病院 副院長・看護部長
田中いずみ

リーダーの自己変容を促す、
パワーの使い方の指南書

「パワー」という言葉に何を想起されるだろうか。ポジションパワー、情報のパワー、医療では専門性のパワーも強くみられるだろう。さまざまなパワーがあるが、パワーを行使するというと、例えば上司が自分のポジションが持つ強制力によって部下を働かせ、自分の思うままに動かすような、どちらかというとなガティブイメージを持たれる方もおられるのではないだろうか。かく言う私も、ポジションパワーをかざさないよう気を付けているつもりである。

しかしながら著者の高岡明日香先生によると、「パワーを掌る」とは、上の立場から不健全なパワーを振りかざして相手を威圧するというネガティブな意味合いではなく、健全なパワーを適切に行使するもので、組織の力学を適切にマネジメントしながら個人の強みを発揮し影響力を行使するものであると述べている。本書はリーダーとしてのハウツー本ではない。組織に渦巻くパワーの正体を掴み、影響力を発揮し続けるために、多くの文献からパワーやリーダーシップに関する理論を紹介した上で、パワーの行使、委譲の具体的な方法について記述されている。

本書の中で私が特に興味深いと思ったのは、キャリアを途中で「脱線」するリーダーに共通する 10 の弱点についての研究（＝脱線研究）の記述である。大企業のトップリーダーとして世界と戦いながら結果を残してきた人でも、その後も必ず成功し続けるわけではなく、キャ

リアを途中で「脱線」するリーダーも少なくないそうだ。しかも、そうした脱線するリーダーには共通する「10 の弱点」がみられ、なんとそのうち 8 つまでは専門的知識や分析力ではなく、対人関係によるものだということである。SWOT 分析やバランス・スコアカードを用いて組織運営をされているところも多いと思うが、いくら状況を分析し、戦略・戦術を練ってもそれを展開するリーダーの在り方によってはうまくいかない。本書によれば、人を動かすためには「合理的判断」だけでなく、「感情」や「無意識・潜在意識」にもアプローチしなければならないとある。読み進めていくと、組織における日々の業務の中でいろいろな場面においてパワーを掌る自分に気づき、リーダーとしての自分の姿があぶり出される。

さらに本書では、ボス（上司）・マネジメントについても紹介されている。日本では上司をマネジメントするという発想が少なく、上司に恵まれなかったと嘆くこともあると思うが、高岡先生の経験を通し、ボス・マネジメントの方法が紹介されており、上司に恵まれていないと嘆いている方にとって、その突破口を見つけることもできるだろう。

パワーを掌るのは相手を変えることではない。本書は、リーダーはもちろんのこと、現在リーダーではない人にとっても、対人関係における自己変容につながる指南書である。